



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

心こころの泥どろを落おとしまししょう

人前ひとまえでスピーチをするのが好きすという方かたはあまりおられないと思おもいますが、私わたしも苦手にがてな方ほうです。日達上人にったつしょうにんはユーモアを交まじえて上手じょうずにされていましたが、私わたしはどうも苦手にがてです。いつもご法話ほうわをしているから5分ぶんくらいのスピーチは平気へいでしよう。と言いわれるのですが、短みじかくてもスピーチはなかなかおぼつかしいものです。知しり合あいのお上人しょうにんにその話はなをしましたら、「ご法話ほうわでしたら1時間じかんでも2時間じかんでも平気へいきですが、私わたしもスピーチは苦手にがてです。特とくに突然指名とつぜんしめいされたりしたら本ほん当とうにあたふたしてしまいますよ」と言いわれていました。

私わたしも、突とつ然ぜんのスピーチは苦手にがてというより、できるなら遠えん



慮りよしたいのですが、今いまから20年程前ねんほどまえに結婚式けっこんしきでそんな機会きかいがあったのです。

日達上人にったつしょうじんのお知り合あいの方かたのお嬢さんじょうさんの結婚披露宴けっこんひろうえんに、日達上人にったつしょうじんと私わたくしがご招待しょうたいいただきました。日達上人にったつしょうじんは主賓しゅひんでした。私わたくしはその方かたの親族しんぞくが少ないため、親族席しんぞくせきに座すわって欲しいほいとのことでは呼よばれたのです。それをお受うけするにあたり事前じぜんに「スピーチは無ないですよね」と確認かくにんしたところ「無ないです」と言いわれたので気楽きらくな気持ちきもちでいました。そして、当日控室とうじつひびかえしつにいと、その方かたが焦あせった顔かおで私わたくしのところに来こられて「日達上人にったつしょうじんが急に体調たいちょうをくずされたようです。席せきになったから、正修上人しょうじょうじん、日達上人にったつしょうじんの代わりかに『主賓しゅひん』をやってももらえないですか」と言いわれました。いきなり主賓しゅひんと言いわれても何なにを話はなしてよいか本当ほんとうに困こまりましたが、ほかの方かたも頼たのまれればやはり困こまられるだろうと思おもい、仕方しかたな



くお引き受けさせていただきました。しかし冷や汗ものだったのを今も思い出します。その時、どんな時に指名されても話せるようにしておかなければいけないなとつくづく思いました。

テーブルスピーチはよく2S1Wが大事だと言われます。

2Sとは先ずshort(短い)です。長いスピーチはどんなに上手でも好まれません。二つ目はsalt(塩)です。スピーチの中に少し塩味が利いていること、人生訓があることです。Wはwitty(機知あふれること)です。ユーモアがあるのが良いということです。

以前、この2S1Wに合致した話を結婚式で聞いたことがあります。

「賢愚経」という経典のお話です。そのお話とは…。



結婚式の前夜に花嫁のお母さんが花嫁に「結婚後の心得」を教えていました。それを偶然、花婿のお父さんが立ち聞きしてしまいました。お母さんの教えた心得は三つありました。一つ目は「いつでも美しい着物を着ていなさい」でした。二つ目は「毎日、おいしいものを食べなさい」。三つ目は「絶えず鏡を見なさい」でした。それを聞いたお父さんはびっくりして、「こんな贅沢な嫁をもらっては大変だ」と思いましたが、もう結婚式の前夜なのでどうしようもありません。結婚を破棄するわけにはいきません。

結婚式の後、お父さんはお嫁さんの行動をずっと観察していましたが、一向に贅沢をする様子もないし、着る物も質素だし、食事もつましいし、鏡もあまり見ません。「一体どういうことだろう」と思ってお嫁さんに尋ねました。するとお嫁さんは「母親に言われた『美しい着物』とは、



「いつも洗濯せんたくをしてきれいな着物きものを着きなさい」ということ
です。おいしい食事しょくじとは「一生懸命しょうけんめい毎日まいにち働はたらけば食たべる
物ものはいつもおいしい」ということです。「鏡かがみを見みなさい」と
いうのは「いつも自分の行いいを反省はんせいしなさい」というこ
とです」と言いいました。それを聞きいたお父とうさんはいたく感かん
心しんをしたというお話はなしです。

宗教評論家しゅうきょうひょうろんかのひろさちやさんがこれに関かんしておもしろい
ことを言いっておられます。

「なるほど、賢愚経けんぐきょうの話はなしは教訓話きょうくんばなしとしておもしろい。しか
し、私はひよっとしたら、母親ははおやの教えおしは文字通りもじどおの意味いみで
あっていいのではないかと思うおもう。というのは、日本人にほんじんはあ
まり家庭生活かていせいかつを大事だいじにしない。外出がいしゅつのときは化粧けいしゆうして着飾きかざ
り、外そとでは高級レストランで食たべても、家庭かていではよれよれ
の普段着ふだんぎでいたりする。それではいけないのだ。楽たのしい家か



庭をつくるべく、もっと日常生活を重視し、外では質素でも良いと思うが、どうだろうか」

作家の山本周五郎さんの短編作品に『寒橋』というのがあります。その中で父親が娘に「女の化粧というものは世の中の飾りと言ってもいいくらいで、薄汚い醜えたような裏店でも、きれいに化粧した女が通れば目のたのしみになる。一時その醜えたような裏店が華やいで見える。つまり春になって花が咲くように、世の中の飾りの一つになるんだ。化粧をするんならそのくらいの気持ちでするがいい」と言っています。

派手に化粧をするのではなく、周りが和やかになるような、身だしなみとしてすることは非常に大事なことです。ひろさんもこの考えだと思います。これは、男



性の身だしなみにも言えることです。身だしなみを整えることは、周りに対する一つの布施かもしれません。

石川真理子さんが書かれた『女子の武士道』という本があります。女性の教養について書かれた本です。この方のおばあさんが米沢藩士の末裔で、厳しくも愛情のある教育を孫である石川さんにされました。

ある時、石川さんが「おばあちゃん、私は自分の顔が好きじゃないの。もっと美人に生まれたかったの。お母さんのように美人に生まれたかったの」と言ったそうです。そこにお父さんがいて、お父さんは非常に落胆したそうです。石川さんはお父さんに顔がとても似ていたのです。お父さんとしては娘が自分に似ていることがうれしくて、また我慢でもありました。ところが娘は「自分の顔が嫌だ」と言



うのがっかりしてしまったのです。その様子を見ておばあさんが笑いながら「お前は美人ではないということはないよ。但し、もっと美人になりたければ、一つ美人になる方法を教えてあげよう。美人は目次第だから、目をきれいにしなさい。目には心映えが現れる。だから明るくきれいな目になりたかったら、明るくきれいな心でいなさい」と言いました。明るくきれいな心でいれば必ず目がきれいになり、美人になれるということです。

美人の基準はその時代によって変わります。現代の美人と平安時代の美人は全く違います。ここで石川さんが言われるのは、永遠に変わることのない基準は太古の昔から今に至るまで、心のきれいな女性は美人だ、ということですよ。おばあさんから教えられたことの一つに「遠い目をせよ」ということがあります。遠くを見るような目つきが大事な



というのです。武士の礼法である小笠原流礼法では「遠山の目付」と言います。遠い山を見るような目つきということです。すぐ目の前を見るのではなく、5メートルくらい先を見るような、壁があっても壁の向こうを見るような目つきをせよ」ということです。日達上人はこういう目をよくしておられました。この目が身につくといろいろな物事が見えてくると言います。

車の運転でも、近くばかり見ていると、パッと人や車が出てきた時に対処しにくいものです。しかし、少し遠くを見るようにしていると、広い視野で物が見えます。これは、歩いている時でも同じだと思います。そして、そういう目つきの人は、人に対してやわらかいとも言われています。人と会って話をする時、じっと相手を見ていたら相手は話しにくいものです。だから、ちよっと遠くを見る目がいい



いというのです。しかし、ずっと目線を外してしまいうのもいいとは言えません。また、目線をきよろきよろしているのもよくありません。相手は気分が悪くなってしまいます。ほかに「気品を感じさせる目遣いをせよ」と言われています。外に出た時はきよろきよろしないように。人をじろじろ見るものではない。一番よくないのは目だけを動かすこと。顔も一緒に向けなさい。その時はゆったりと顔を動かすように。わずかに首をかしげるように。と、とても細かいことを言われました。

また、「眉をいつも開いていなさい」とも言われました。眉を寄せると眉間にしわが寄り、おっかない目つきになるのでよくない。というのです。

石川さんは「たかが目の遣い方一つになんとうるさいことかと思われるかもしれないが、目は口程にものを言う



んです。やはり配慮はいりよしたいものです。身みについてしまえば
どうということはないですよ」と言いわれています。ゞきれ
いになりたいなら先まずは心こころからぐということですよ。

※どろ『泥かぶら』という絵本えほんがあります。このお話はなしはもともと
眞山美保まやまみほさんが創作そうさくされた劇げきです。1952年ねんに初演しよえんされ
てから日本全国にほんぜんこくはもとより、海外かいがいでも上演じよえんされていて、一
万五千回まいごせんかいじよう以上も演えんじられてきた作品さくひんです。このお話はなしに感かん動どう
された、くすのきしげのりさんが絵本えほんにされました。

「泥どろかぶら」とは、泥どろの付ついたかぶらのように、みにくい
女おんなの子このことですよ。

女おんなの子こは泥どろかぶらのように汚きたなく、みにくいということよ、
子こども達たちからさんざん笑わらわれ、けなされ、石いしを投なげられ、
つばを吐はきかけられていたのです。かわいそうに女おんなの子こは



親兄弟おやきょうだいもなく、独りぼっちのさみしさから心こころがすさんでいき、粗野そやで荒々あらからしい子こになっていきました。

ある日のこと、女の子おんなこが誰だれに言うともなしに吠ほえるように「きれいになりたい！」と叫さけびました。そこに旅たびの老法ろうほう師しが通とりかかり「そんなにきれいになりたいなら、きれいになる方法ほうほうを教おしえてやろう」と言いいました。その方法ほうほうは三つあり、一つ目めが「自分の顔かおを恥はじないこと」で、自分じぶんに誇ほこりをもてぐということです。

二つ目めは「いつもニッコリ笑わらっていること」です。どんな人ひとからひどい仕打ちしうちを受けてもニッコリ笑わらっていることです。要よするに、堪忍かんにんをすることぐです。

三つ目めは「人の身みになって思おもうこと」です。慈悲じひ深く生きよぐということぐです。

「この三つを守まもれば村むら一番ばんの美人びじんになれる」と教おしえて、老ろう



法師は去っていききました。

「泥かぶら」と言われ、蔑まれていた女の子は、美しくなりたい一心でこの三つの教えを涙ぐましい努力で実行し続けました。どんなに嘲られ、石をぶつけられても、負けるものかと、石を投げ返したいところをぐっと我慢してニコリ笑っていました。そして、慈悲深く、人の身になつて生きよぐということを守つて、重病人のために危険な崖をよじ登りながら薬草を採つてきたり、老人のために山の枯芝を集めて来たり、自分でできる徳積みを一生懸命にやりました。そのうちにその女の子は、人の役に立つのがうれしくなり、楽しくて、仕方がなくなりました。いつしか美しくなりたいぐということも忘れ、ただただ人の喜びを自分の喜びとして働くことに徹していくようになりました。すると周りの人々の態度も変わってきました。友達



もでき、村の人達も本当にその女の子を愛するようになり
ました。

そんな時、人買いのじろべえが村にやってきました。も
みじちゃんという体の弱い女の子が、親の借金の形に連れ
て行かれることになっていました。それを知った「泥かぶ
ら」と呼ばれた女の子は「私が代わりに行く」と言いまし
た。すると人買いが「これからどんな目に遭うのかわかっ
ているのか」と言いましたが、「知らないけど私が行く。
もみじちゃんは体が弱いし、かわいそうだから。私は身寄
りもないし、私を連れて行って。私なら丈夫だから、どん
なことでも耐えられるよ」と言い、人買いに連れて行かれ
ました。

この人買いとの旅の途上でも、老法師の三つの教えを守
り続けました。その姿を見て人買いが「売られて行くとい



うのに、お前は^{まえ}どうしてそんなに^{あか}明るくしていられるのだ」と聞^きくと、「自分^{じぶん}はもみぢちゃんを助^{たす}けられて幸^{しあわ}せなんだ。人の役^{やく}に立^たつことは楽^{たの}しい。そして、おじちゃんをお父^{とう}さんのように感^{かん}じるんだ」と言^いいました。そのうちに、その優^{やさ}しさ、愛^{あい}情^{じょう}にあふれた行^{こう}動^{どう}に心^{こころ}を打^うたれたじろべえが独^{ひと}り言^{こと}を言^いいます。

「どうしちまったんだ。悪^{わる}いことしかしたこと^{こと}のねえオレが、柄^{がら}にもなく優^{やさ}しくなっちゃまってよ。しかし、あの子^こをこのまま親^{おや}方^{かた}のところへ連^つれて行^いってもいいものか。かとい^いってあの子^こを逃^にがすって訳^{わけ}には…。いや、待^まてよ。そうだ、オレが消^きえればいいんだ。あの子^この前^{まえ}からも、鬼^{おに}のよ^ような親^{おや}方^{かた}の前^{まえ}からも。そうすりゃ、もしオレが見^みつかってどんな目^めに遭^あおうともあの子^こは無^ぶ事^じだ。生^うまれて初^{はじ}めてだが、オレもあの子^このよ^ようなことをしてみるか。ふっ、さん



ざん悪いことをしてきたぶん、いいことを一つするにも命
がけだぜ」

そうして、女の子が寝ているうちに、じろべえはすつと
いなくなりました。月明りで女の子が目覚ますと、じろ
べえの羽織がかけられていて、近くの大きな木に手紙があ
りました。その手紙にはこう書いてあったのです。

「お前はオレのような悪人にまでよくよく親切にしておく
れだった。オレは正直で優しいお前の寝顔を見ていて恥ず
かしくなった。それから胸の奥が温かくなったよ。オレは
今日から人買いななど辞める。良い仕事をしようぞ。お前は
これからも変わらず、誰にでも親切にしておやり。金を二
両置いておく。もっと置けると良いのだけれど、オレも貧
乏だから勘弁しておくれ。お前の優しい笑顔、お前の明る
い笑い声。オレは一生忘れない。ありがとうよ。どうかど



うか幸せしあわになつておくれ。じろべえ。仏さまほとけのように美し
い子こへ」

手紙てがみを讀み終え、それまで「泥かぶら」と呼ばれた女の
子こが自分じぶんの顔かおを水みずに映すと、月明りに照らされたその顔かおは、
旅たびの老法師ろうほつしが言いつたとおり、なんともやさしく、美しく、
幸せしあわそうに輝かがやいていたのです。

この絵本えほんの結むすびには「人ひとはみな、心こころについた泥どろを落おとす
ことができれば、まっ白しろな美うつくしいまごころが表おもてにもあきら
かになるのでございます。…そう、心こころについた泥どろを落おとす
ことができれば」とありました。

※『泥かぶら』原作 眞山 美保

文 くすのき しげのり

絵 伊藤 秀男

出版社 瑞雲舎

